**いとうせいこう×奥泉 光**

**＜文芸漫談シーズン４＞**

**島尾敏雄「死の棘」**

この企画は、いとうせいこうと奥泉光が、小説の面白さを、笑いを取りながら伝えたいと、漫談形式で始めた文学ライブです。

芥川賞作家と稀代の仕掛人が捨て身でおくる、漫談スタイルの超ブンガク実践講座。

*小説の書き方・読み方がクスクスわかる？かも！*

作家・クリエーターとして活躍する“いとうせいこう”と、芥川賞作家であり大学教授の“奥泉光”による耳馴染みのない『文芸漫談』なる公演が、成城ホールで行われる。

この公演は、下北沢の北沢タウンホールで2006年から年3回のシリーズで行ってきたもので、今回はその42回目。お題は島尾敏雄の『死の棘』。

内容、構成はいたってシンプルで、文学作品を題材にし、笑いを盛り込み、二人で作品を語っていく、漫談形式のトークショーです。

同類のトークショーのように、作品への理解を与えることにこそ違いはないのですが、そこに、博学がユーモアをまとったような二人の『笑い』が入ることにより、お客さまの興味をより深いところまで誘い、“豊かな文学”になるのでは、との試みです。

今回の「死の棘」は、思いやりの深かった妻が、夫の情事のために突然神経に異常を来たした。狂気のとりことなって憑かれたように夫の過去をあばきたてる妻。ひたすら詫び、 許しを求める夫。  
日常の平穏な刻は止まり、現実は砕け散る。狂乱の果てに妻はどこへ行くのか・・・・・  
何だ、それなら知っているよ！と、言われる方も、二人の手にかかると、こんな読み方もあったのかと納得いただけるものと思いますよ！

出演■**いとうせいこう×奥泉 光**

日時■**2017年10月5日（木）19：00開場／19：30開演**

料金■2,500円（全席自由）※開演の1時間前より入場整理券を発行します

会場■成城ホール（☎ 03-3482-1313）世田谷区成城6-2-1

　　　　　　小田急線「成城学園前駅」下車徒歩5分

ﾁｹｯﾄ問合せ■Ｋ・企画　（☎＆FAX 03-3419-6318）

　　　　　　　HP <http://k-kikaku1996.com>

　　　　　　　E-mail <bungeicomic\_4@k-kikaku1996.com>

　　　　　■成城ホール　（☎ 03-3482-1313）

　　　　　　　HP <http://www.seijohall.jp>

　　　　　■北沢タウンホール（☎ 03-5478-8006）

　　　　　　　HP <http://www.kitazawatownhall.jp>

　　　　　■イープラス

　　　　　　　HP <http://eplus.jp/>

主催■成城ホール（アクティオ株式会社）

企画製作■舞台よろず相談所 Ｋ・企画

**『死の棘』あらすじ**

思いやりの深かった妻が、夫の情事のために突然神経に異常を来たした。

日記によって不倫をしていたことがバレてしまい、妻の執拗な問い詰めが始まる。それは昼も夜もなく続き、子供たちは空腹を訴え、食事も睡眠もままならず、妻との緊迫したやり取りが何日も続いた。

夫は妻に問われるままに不倫のことや、自分がどう思っているかを話すのですが、妻は全然納得しない。

その時は納得したとしても、後から思い出したように「ひとつだけギモンがあるの。きいてもいいかしら」と言い始め、話はまた振り出しに戻ってしまう。

夫は小説家なので原稿料が頼りですが、それだけではなかなか食べていけないこともあって、夜間高校で世界史と一般社会を教える非常勤の仕事を週に２日ほどしている。

ところが、外出すると妻の様子がおかしくなるので、仕事にも支障が出てくる。

小説家としての仕事の打ち合わせにもなかなか出られない。

やがて、妻が発作を起こしておかしくなると、精神的に追い詰められた夫も、おかしくなったふりをするようになる。

自殺するふりをしたり、電車に飛び込もうとしたり、首吊りをしようとしたり・・・

どちらかが死のうとか、みんなで死のうとか、そういう話が出るが、まだ幼い６歳の息子と４歳の娘をどうするかという問題があるので、いつもみんなで一緒にやって行こうということになる。

妻の発作はやがて、妻の生まれ故郷の島の方言で貝を表す「グドゥマ」と呼ばれるようになる。

「あたしはグドゥマにはならないんだから」と妻は言い、落ち着いたかと思うと、寄せては返す波のように、また新たな発作は起こす。

夫婦のぶつかり合いは、当然子供たちにも影響を与え、「カテイノジジョウ、しないでよ」と伸一が言うようになる。

先の見えない夫婦の関係性に、明るい光が見える時は来るのか！

ぎりきりまで追いつめられた夫と妻の姿を生々しく描き、夫婦の絆とは何か、愛とは何かを底の底まで見据えた凄絶な人間記録。

**島尾敏雄　＜1917年〜1986年＞**

横浜生れ。九大卒。

1944（昭和19）年、第18震洋隊（特攻隊）の指揮官として奄美群島加計呂麻島に赴く。

1945年8月13日に発動命令が下るが、発進命令がないままに15日の敗戦を迎える。

1948年、『単独旅行者』を刊行し、新進作家として注目を集める。

以後、私小説的方法によりながらも日本的リアリズムを超えた独自の作風を示す多くの名作を発表。

代表作に『死の棘』（日本文学大賞・読売文学賞・芸術選奨）、『魚雷艇学生』（野間文芸賞・川端康成文学賞）など。

**出演者紹介**

**【いとうせいこう】**

1961年、東京生まれ。 早稲田大学法学部卒業。 作家・クリエーター。

『ノーライフキング』で小説家としてデビュー。

その後『ワールズ・エンド・ガーデン』『解体屋外伝』『豊かに実る灰』『波の上の甲虫』などを執筆。

2013年『想像ラジオ』で第35回野間文芸新人賞受賞。

最新作『鼻に挟み撃ち』（2013年すばる12月号）で2度目の芥川賞候補にノミネート。

主なエッセイ集として『見仏記』（共作／みうらじゅん）『ボタニカル・ライフ』などの他、舞台・音楽・テレビなどで活躍。

公式HP＝http://www.froggy.co.jp/seiko/

**【奥泉 光】**

1956年、山形生まれ。国際基督教大学大学院修了。小説家・近畿大学教授。

主な小説に『ノヴァーリスの引用』『バナールな現象』『「吾輩は猫である」殺人事件』『プラトン学園』『グランド・ミステリー』『鳥類学者のファンタジア』『浪漫的な行軍の記録』『新・地底旅行』『神器—軍艦「橿原」殺人事件』などがある。

1993年『石の来歴』で第110回芥川賞受賞。

2009年『神器—軍艦「橿原」殺人事件』で第62回野間文芸賞を授賞。

2014年『東京自叙伝』で谷崎潤一郎賞を授賞。

公式HP＝http://www.okuizumi.com/